

何事にも定まった時期がある ~ 世の中への贈物 ~

今日(2025年12月28日)は年末である。時の経つのは、早いものである。昨年(2024年)の年末(12月28日)は、アメリカ ワシントン州に住む娘夫妻を Wife と訪問したのが懐かしい想い出である。今年の年末は、自宅で過ごす。

12月29日は、故郷の出雲大社鵜崎から姉が上京し、羽田空港に Wife と向かいに行く。12月30日は、現在 横浜と東京に在住の従姉妹(父の妹：叔母様の2人の娘様)の家族が訪問されるので昼食会の時を持つ。

筆者が京都での浪人時代に、お世話になった叔母様(父の妹)は、2021年12月に91歳でご逝去された。2022年1月2日には、娘様の家に Wife と訪問した(横浜)。娘さん夫婦、妹さん、お孫さん夫婦とお逢い出来た。早速、【『楽しい時間をありがとうございました。数十年を振り返る時が与えられました。また息子夫婦の若い家族にとっても、とても良い機会が与えられました。みんなのお喋りを聞いて、母は喜んでいることと思います。』&『青山の国連大学での講演会に両親と出向いたことも 懐かしい想い出です。』】との心温まるメールを頂いたものである。涙無くしては語れない！

筆者が京都での浪人時代にも読んだ親鸞(1173-1263)の『歎異抄』の【『人種、性別、年齢、能力、貧富に関係なく、誰もが平等に『人間に生まれて良かったと言える』】、また、京都での浪人時代を機に知った内村鑑三(1861-1930)の『後世への最大遺物』の【『われわれが死ぬときには、われわれが生まれたときより 世の中を少しだりとも 善くして 逝こうじゃないか』&『勇ましき高尚なる生涯 = 世の中への贈物としてこの世を去る』】が、今回、鮮明に蘇ってきた。

まさに、『何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。』(伝道者の書3章1、2節)の復習の時ともなった。